龜谷行編

脩身兒訓

四

K110.1
31
4

修身児訓巻之四

龜谷行編

第一章　厚德

○今の人恩惠を受けてハ多く記省せず。人ゐ惠む所あるとバ。微物と雖ども。亦歴々心ゐ在り。古人言ふ。人ゐ施しては念ふ勿れ。施を受けてハ忘るゝ勿れと。袁氏世範

○凡恩澤を報いざるの地ゐ施を。便是陰德

を積ミ。以て子孫ハ遺をあり。人をして怒ると雖ども。敢て言はざらしむ。便是陰德を損をる處あり。言行彙纂

○唐の王仲舒。寶帶を賣りて橋を澧臺湖ハ築く。長三十餘丈。以て行人を濟を。世之を寶帶橋と名づく。後三子皆貴顯あり。丹桂籍

○人妄りに樹木を毀損し。又蒸餅菓實其他有益の物を棄つるを。是天の賜をのを無益ハ失ふの罪あり。若し此等の物を以て窮餒

ル者ハ與へべ。慈惠の一端さるべし。勸善訓蒙

○晉陵の梅鱗。生平義を重んず。慷慨施を好む。中年子あし。善を嗜むこと益篤し。親戚窘乏の者あれば輒之を救ふ。里黨の中咸仁人長者を以て之を頌を。後二子を生ミ。家業巨萬。壽七十ハ至る。丹桂籍

○高郵の張百戸淮安ハ往き。舟を湖堤ハ泛ぶ。遥に小船の波上に浮沈をる殘見る。人あり舟の背ハ據り。救ひを呼ぶ。張急ハ白金十

兩を出し。漁舟を呼びて之を救ふ。至るに其子なり。同上

○蜀漢の張裔。少くして楊恭と友とし善し。恭卒す。遺孤未だ數歲に及ばず。裔は恭が母を迎へて之に事へ。恭が子の爲めに婦を娶る。田宅を買ひて之に與ふ。人其義を重んぜ。後に益州の太守と爲る。同上

○宋は吳奎少き時甚貧し。後資政殿大學士に除せらる。青州に知たり。是に於て田を買ひ義莊となし。以て族黨朋友を贍す。沒するの日に至り。家に餘資なし。宋史吳奎傳

○宋の祖無擇。人となり義を好みて。師友に篤し。少くして孫明復に從ひ。經術を學び。又穆脩に從ひ。文章を爲る。兩人死す。力めて其遺文を求め。彙めて世に傳ふ。宋史祖無擇傳

○宋の沈倫相位に在るの日。歲の饑ゆるに値ひ。鄉人乃粟を假る者は。皆之を與へ。殆んど千斛に至る。後又盡く其券を焚けり。宋史沈倫傳

○陳瑾家甚貧し。義を行ふは急なり。常に諸子を戒めて曰く。貧乏の者に遇ちゞ宜しく力に隨ひ。之を賑ふべし。若し富を待て。之を行ふ時ゞ。吾が輩終に人を濟ふの期あらん。（畜德錄）

第二章　躬行

○荀子曰く。凡そ百事の成るや。必ず之を敬するに在り。其敗るゝや。必ず之を慢るに在り。故に敬。怠に勝てば吉なり。怠。敬に勝てば凶なり。

○貝原益軒曰く。凡そ事を作すに。始を謹み。終を慮るべし。過寡く悔少し。故に事を作すに。先づ思ふ。思ひて輕率に事を作せば。必ず過ちあり。過てば必ず悔あり。（初學知要）

○又曰く。學を思ひに原づくと雖ども。間思雜慮甚だ心術に害あり。學者須らく胸中を。泰然事なく。以て有用の思慮應接を待つべし。

○又曰く。輕惰二ツ者ハ學を爲すの大病なり。輕き者ハ未だ得ざるを以て既に得るを爲し。惰る者ハ悠緩にして。進むこと能はず。張子曰く。輕きを矯め。惰るを警むと。

○又曰く。學者固より當に勉强して懈らざるべく。又須らく心志を寬舒にし。精神を愛養すべし。此の如くなれば。局促の態なく。從容の象あり。二ツの者並び行はれて相悖らざるべし。

○陳了翁閒居なれど。容止常に莊敬なり。苟も言を發せず。一日家人と語る。家人戲れに問ふ是實なりや否やと。公退て自らを責ること累日なり曰く。吾豈に人を欺くことあるや。何為れぞ此問ひあるや。劉氏人譜

○宋の趙康靖。嘗て二瓶を几上に置き。一善念を起すを每に一白豆を投じ。惡念ハ一黑豆を投じ。始めハ黑き者多し。既にして絶て少し。久しけれバ善惡都て忘る。瓶豆を亦用ゐ

び。丹桂籍

○清乃張敦復曰く。人之家ニ居り。身を立つる。最奇を好むべからざる。人能く倫常ニ於て缺くるなとなく。起居動作家を治め人を待つ。事々矩度ニ合ハヾ。便是君子の人。豈ニ別ニ奇を尋ね怪を求むるけんや。聰齋訓語

○宋乃劉元城。司馬温公を見て。心を盡し已を行ふの要。以て終身之を行ふべき者を問ふ。温公曰く。其き誠り。元城問ふ。之を行ふ何をか先ニきん。温公曰く。妄語せざるより始まる。小學

○中庸ニ曰く君子の及ぶべからざる所の者ハ。其惟人の見ざる所か。程子曰く。學ハ闇室を欺かざるより始まる。

○元の許魯齋。河南を過ぐ。道ニ梨あり。衆争ひ取りて之を啖ふ。魯齋獨取らず。或人曰く。世亂れて主なし。之を取るも何ぞ傷らん。魯齋曰く。我が心獨主なからんやと。卒ニ取ら

ぞ〳〵去る。丹桂籍

○蘇黄門。凡そ日中為せる所の事。夜必ず之を紙に記せ。人其故を問ふ。曰く。事を為せば。必ず天理に循ふ。敢て記せざる者は。敢て為さざるあり。同上

○羅馬帝泰苔士。その志。善を行ふに急あり。毎夜。日間のせる所を省視し。或は一善なければ。懊惱して曰く。嗚呼。余一日を失ふと。西稗雜纂

○佐藤一齋曰く。均しく是人なり。游惰なれば弱あり。一旦困苦せば強とあり。意に愜へば柔あり。一旦激發せば剛とあり。氣質の變化せること此の如し。言志録

○明の蔡虚齋曰く。道德ある者は必ず多言せず。信義ある者は必ず多言せず。才謀ある者は必ず多言せず。惟夫の細人、狂人妄人乃ち多言せるのみ。劉氏人譜

○明の薛敬軒曰く。人口を開けば皆能く禮

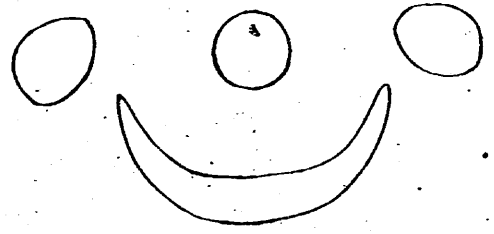
義を談じ。名節を論ず。利を見るに及でハ必ず趨り。勢を見てハ必ず附く。又禮義名節の何物たるを知らざる也。畜德錄

○宋の邵康節。其子伯温に告て曰く。汝固より當に善を為すべし。亦須らく力を量り以て之を為すべし。若し力を量らざれバ。善と雖ども。亦為すべからざる。同上

○宋の潘叔度ハ。呂伯恭と同年進士なり。叔度年長じて。其學伯恭に如ずず。即チ首を俯し。弟子の禮を執り。之に師とし事へ。略ボ難む色なし。朱子甚だ稱歎せ。劉氏人譜

○明の太祖曰く。凡そ人善あれバ自ら矜る。善なるのみ。自から矜れバ。善日に削らる。不善あらば。自ら怨む

平心則無偏



べからず。自らの怨をなバ惡日ハ滋し。

○又曰く。人の常情。多く己れを能ハ矜り。多く人の過を言ふ。君子ハ然らず。人の善を揚げて。己れを善ハ矜らず。人の過をゆるして。己れを過をゆるさず。

○自らの謙をなす。人愈服し。自らの誇をなバ。人必ず疑ふ。我恭をなバ。以て人の怒氣を平らをべく。我貪るれば。必ず人の爭端を啓く。我致を。是皆我ハ存する者なり。金言

○明の文徵明。人の過ちを聞くことを喜ぶ。道ひ及ぶんと欲する者あるなバ。必ず巧ハ他端を以て之を易へ。其説を竟へ去めず。其孫震孟狀元ハ中り。名行俱ハ隆し。丹桂籍

○宋の范忠宣。子弟を戒めて曰く。人至愚と雖ども。人を責むるハ明あり。聰明ありと雖ども。己れを恕するときハ昏し。但當ハ人を責むるの心を以て人を恕すべし。習是編

○韓非子曰く。智は目の如し。能く百歩の外

を見て。自ら其睫を見ること能はず。故に知るの難きは。人を見るに在らずして。自ら見るに在り。故に曰く。自から見ふ之を明と謂ふ。

○力餘りあるに好事を行ひ。力足らざるに好心を存す。力足らずして。勉めて好事を行ふ。真に是好事なり。力餘りありて。徒らに好心を存するハ。好心と謂はざる也。習是編

○章文懿嘗て言ふ。學者身を奉ずるに華侈を好むべからず。苟も華侈を好めバ。必ず貪り得ることを致す。他日官に居り決して清白なることを能はず。同上

○外に樂易なる姿態を顯はし。快活なる情狀を現すも。内に深沈の性質なけ也。人に尊敬せらるべし。西洋行論品

第三章　立志

○朱子曰く。學を為すハ。先づ須らく志を立つべし。志既に立てバ。學問次第に力を着

くべし。志を立ること定まらざれば。終ゐ事を濟さず。

○王陽明年十一。師ゐ問ふ何をか第一の事と為す。師言ふ。書を讀み及第をるのみと。陽明の曰く。此未だ第一の事とせず。第一の事は其聖賢たるゐ在るか。畜德錄

○福格斯曰く。失敗を恐れども屈せず。進み往きて止まざる人も。吾が望の深く屬をる所なり。一試して功を成し。浮泛ゐして定らざる人ゐ勝ること遠し。歐米立志金言

第四章　愛日

○晉の陶侃曰く。大禹ハ聖人なり。寸陰を惜むべし。衆人ゐ至りてハ。當ゐ分陰を惜むべし。豈逸游荒醉をべけんや。生て時ゐ益なく。死して後ゐ聞ゆること無きを。是自ら棄るなり。

○人あり。細々里王地窩尼修士ゐ請ふ。若し間暇あらバ願くハ謁見を得んと。王答へ

めて曰く。天我を戒め。常に閑暇あらしめぜ。

西稗雑纂

○若克孫曰く。世上の財貨を。耗散せと雖ども。後日の儉約に因り償ふことを得べし。今日失ふ所の光陰を誰か能く取り得る者有んや。

歐米立志金言

第五章　學問

○司馬温公曰く。書を誦を成さゞるべからぜ。或を馬上にあり。或を中夜寐らさざる時に在りて。其文を詠じ。其義を思へを得る所多し。

○司馬温公賓客に對し。賢愚長幼を問ふことなく。悉く疑事を以て之を問ふ。苟も取るべきことと有さば。手に隨て記錄し。或を客に對して即書し。率ねて常と爲を。

自警編

○程子曰く。君子の學を必ぜ日に新るり。日に新なる者を日に進む也。日に新あらざる者を必ぜ日に退く。未ざ進まざして退らざ

故者を有らざる也。

○貝原益軒曰く。日日に新さまをる者ハ。一日も一日の工夫あり。一歳も三百六十日の工夫あり。若し積て十年に至らバ。其長進をる所。測るべからざる。故に學者ハ日々に新さにをることを貴ぶ。

第六章　勉強

○中庸に曰く。人一さびして之を能くをを。己れ百たびし。人十たびして之を能くす

れバ。己れ之を千さびし。果して此道を能せバ。愚ありと雖ども必ず明に。柔ありと雖ども必ず強し。

○漢の董仲舒曰く。事も勉強に在り。勉強して學問をを。聞見博くして智益明あり。勉強して道を行へバ。德日に起りて大に功あり。

○漢も盧植も。馬融に學びて。能く古今に通ず。融が外戚も豪家あり。多く歌舞を列ぬ。植

侍講せること積年。未ざ嘗て回顧せざ。融是を以て之を敬せ。後漢書盧植傳

○銹の鐵を腐爛せるハ。砥石よりも疾く。怠惰の人ハ傷害せるた。工作ハ勞よりも速ら

なり。西洋品行論

○人の一生ハ。始より終ハ至ふまで。經驗習練の大學校と者做せ。時あり難難辛苦の事ハ遇ふとも。之を天命ありと思ひ。務て學習せざるべからず。同上

第七章　倫常

○韓伯俞少しく過あり。其母之を笞つ。伯俞涕下る。母ハ曰く。他日笞てども汝未ざ嘗て泣らず。今泣くハ何ぞや。對て曰く。昔ハ笞ふて痛あり。今母衰老して力乏し。まと痛ましむること能ハず。是ハ以て泣くあり。習是編

○顧愬父の書を得ばハ必ず拜跪して之を讀む。句毎ハ應諾す。後子孫繁盛ハ比ひあり。丹桂籍

○父母卑賤なりて。我幸に貴きことを得た。父母の恩を忘ることなく。之を尊敬せざし。若し高位高官に昇り。父母の恩を忘る者を。其罪尤も大なりとす。勸善訓蒙

○貝原益軒曰く。毎日夙に起きて家庭を掃除し。先づ父母の氣色を候ひ。飲食乃好む所を問て之を進め。求めあらば之を奉じ。勉免て其歡心を盡すべし。家道訓

第八章　處世

○呂叔簡曰く。世間往く處として意に拂る事なきは無し。一日とあく意に拂る事なしは無し。惟度量寛弘なる者は。受用の處あり。彼の局量褊淺なる者は。空しく自ら懊恨をるとす。畜德錄

○人剛を好めば。我柔を以て之に勝ち。人術を用ゐれば。我誠を以て之に感ず。人氣を使へば。我理を以て之を屈すれば。天下處し難きの事なし。紳瑜

○人の我に負く所以て。善を為ぶの心を隳そこと勿れ。其德を施せる當うて。たゞ自ら我が心の忍びざる所を行ふのみ。未だ嘗て報を責めざる也。縱令よのちざる者に遇ふも。只一笑に付せよ。金言

○人此善性を發出せるハ。患難禍災より善きをなし。譬へば香草の碎搾せらるゝて。馥郁たる香氣を發するが如し。西洋品行論

○義爾士金の詩に曰く。禍難を苦痛を覺ゑ

ざるとは雖ども。實に福慶の積塊なり。然れども禍難の中より福慶を視出せる人少なし。余を禍難を以て。余を試るの洪爐となし。余を鑄るの造錢局と思へり。西洋品行論

○利久手爾曰く。人貧困を受くとも。何ぞ怨謗不平の語を出せを用ゐんや。貧困ハ恰も處女に耳茂刺るゝの痛みに過ぎざるのみ。而して其創の中に貴重の寶玉を掛ることを得べし。歐米立志金言

○衆人廣坐の中にて爭論を慎むべし。爭論は必ず黨派を起す。若し衆中に爭論發せば。温厚の言戯謔の語を以て。之を勸解すべし。智氏家訓

○人乃謗。果して實あらば深く自ら悔責すべし。躬に省みて愧づること無くんば。只之を聽うんのみ。前人云ふ。何を以て謗りを止めん。曰く。辯ずること無し。辯ずるとは愈力むべし。謗ること愈巧みなり。金言

○凡族衆假貸する所あらば。吾が力量の厚薄に隨ひ之を與ふべし。必ずしも還せと言はず。縱ひ其欲に滿さずして之を怨むとも。亦償ひ求責する時に甚しきに至らず。習是編

○事を處する最熟思緩處を要す。熟思すれば其情を得。緩處すれば其當を得。最輕忽怠亂すべからず。至微至易の者と雖ども。皆慎重を以て之に處すべし。同上

○泛交あれば費多く。費多ければ營ミ多し。

營ミ多キヲ求ムレバ求多ケレバ辱多シ。惟事を省きて廉を養ヒ。交を慎ミ以て德を成そべし。願體集

○高きに居て。みづから卑くせバ。愈光あり。卑きに居て。自ら高ぶレバ。愈望ミなし。靜寄軒文集

○凡國家の禮文制度法律條例の類。若し能く熟觀して深考せバ。以て世務に應酬し。時宜に戻らざるべし。紳瑜

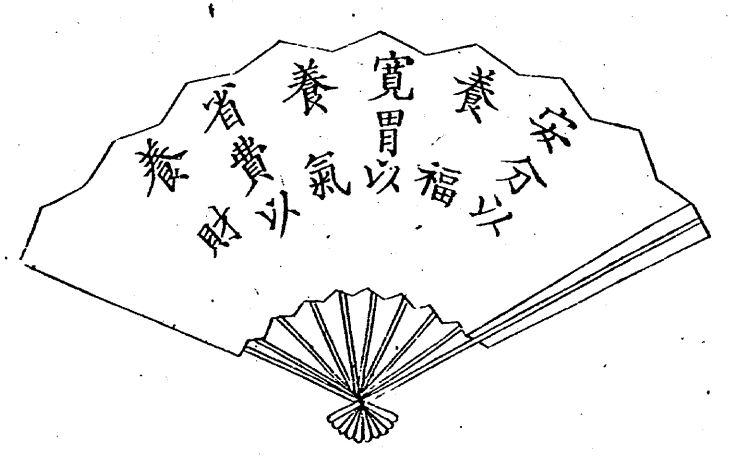
○富貴の家に。貧賤なる親戚の出入するハ。主人仁愛の厚きこと顯レ。其家の榮譽なり。然るに或て之を恥る者あり。豈誤りならずや。家道訓

第九章　交際

○君子の交りや。道義を以て合ひ。志氣を以て親ミ。淡きこと水の如し。故に能く久し。小人の交りや。勢利を以て結ぶ。酒食を以て親み。甘きこと醴の如し故に怨み易し。習是編

○貝原益軒曰く。君子の人に接る禮讓を以てせ。故に爭ふ所なし。夫れ才能を爭ひ。功業を爭ふ。權力を爭ひ。意氣を爭ふ。皆小人の為せる所。禮讓の道に非ず。且禍を取る此道なり。

○人不義の事を為せ



を見て。諫めて之を止むべし。知て諫めず。諫めて力勇なし。友我して過ちを遂げ成さしむるなり。亦我が咎なり。智氏家訓

第十章　家制

○貧富俱に勤儉の二字を欠得ず。勤は孜々利を為すに非ず。唯力を竭して經營をるに在り。儉を鄙吝堪へざるに非ず。只是入を量りて出をことを為をるなり。習是編

○苟くも節儉にして。其家を保ち。其生を送

うあべ。資産を小みるとも精神ハ大なることを得べし。然らずして。徒らに金錢を慕ふべ。此人を極て貧しと言ふも亦可なり。西洋品行論

○主人も一家の模範なり我能く勤めば。衆何ぞ敢て惰らん。我能く儉ならば。衆何ぞ敢て奢らん。我能く公ならむ。衆何ぞ敢て私せん。我能く誠なるべ。衆何ぞ敢て偽らん。願體集

○他人ハ僮僕。我を遇する。或ハ不恭なるも。彼と我と主僕の分なし。較ぶるに足らず。若し自己の僕婢を之を戒飾を加へし。智氏家訓

○權家の奴僕ハ。主人の權威を挾みて賓客を侮り易し。主人なる者。時々心を用ゐて無禮を戒むべし。奴隷の無禮を責むるに足らべ。賓客恚みて其主人を誹るに至る勿し。家道訓

○陳確修曰し。此輩惟智慧なし。故に奴僕と為る。若し亦智慧あらば下賤と為らざる。此

を以て心に存せざ。自らら苛求せるに至らず。丹桂籍

第十一章　改過

○周子曰く。仲由は過を聞くことを喜びて令名窮りなし。今人過あるを恥ぢ。人の規をことを喜ばず。疾を護して醫を忌ぶが如し。寧ろ其身を滅ぼすに悟るに至らざるし。

○魏の陽固は。少くして任俠。劍客を好む。生産を事とせず。年二十六。始て節を折り學を好み。遂に博覽文才あり。魏書陽尼傳

○唐の李安遠少くして檢束なし。無賴の徒と游ぶ。産を破るに至る。晩に節を折り學に嚮ひ。士大夫に從ふ。苟くも己に勝るを必ず心を傾けて之と交る。安遠後に懷州の刺史に至る。新唐書裴寂傳

○唐の趙武孟少くして游獵し。獲る所を以て其母に饋る。母泣て曰く。汝書を好まざるを敎蕩せ。吾安んぞ望んやと。為に食せず。武

孟感激し。遂に力學して右臺侍御史となり。河西人物志一篇を著せ。新唐書趙彦昭傳

第十二章　警戒

○善を為さゝ。重を負て山に登るが如し。志已に確こと雖ども。力及ばざるを恐る。惡を爲さゝ。駿馬に乘て坂を走るが如し。鞭策を加へずと雖ども。足亦止むこと能はず。省心雜言

○堯戒に曰く戰々慄々として。日に一日を慎む。人。山に躓づくこと無くして垤に躓づく。是故に人皆小害を輕し。微事を易どり。以て患を招くに至る。初學知要

○貧賤は勤儉を生し。勤儉は富貴を生し。富貴は驕奢を生し。驕奢は淫佚を生し。淫佚は復貧賤を生ず。此循環の情理なり。多識編

○一切の事。俱に儉朴誠實を要ず。浮華を學ぶ勿れ。蓋し浮華は一時を光耀すと雖ども。究に實事に益なし。人の名を敗り禍を

得る者。都て奢侈の致す所に由る。石天基知世事

○人生。世に於て未だ心力を勞せざる者あらば。或は心を勞して力を勞せば。或は力を勞して心を勞せず。若し心を勞せず。又力を勞せば。是れ乃ち饑莩無用の人なり。紳瑜

○佐藤一齋曰く。少しく才ある者は。往々好で人を輕侮し。人を調笑す。失德と謂ふべし。侮を受る者徒らに己まば。必ず憾みを之を譖る。即ち自ら譖るなり。言志錄

○幼くして肯て長ずる事へば。賤くして肯て貴ぶ事へば。愚ぶして肯て賢ぶる事へば。此れ是れ人の三不祥なり。總て是れ傲氣害を為すのみ。世人先づ傲氣を除き去り。總ぶる事を成す。知世事

○貴くして傲慢なる人は。氣球の膨脹して昇騰せる者ぶる等し。只其外貌を裝飾して。內部は實ぶる空虛なり。勸懲雜話

○ビルマン日耳曼人の語ぶる曰く大人の品行の中ぶ

於て。其瑕疵あるを搜り出せを以て專務とする人あり。痛べきの性情と謂ふべし。西洋品行論

○貝原益軒曰く。易に曰く。天道は滿つるを虧くと。又古語に曰く。多く藏むれば厚く失ふと。蓋し多く財を聚めて人の貧苦を救はざれば。必ず其財殘失ふに至る。家訓

○程子曰く。吾未だ財に嗇ぶりて。能く善を爲す者を見ざる也。吾未だ誠あらずして。能く善を爲す者殘見ばるあり。畜德錄

○餘り有るを待て人を救はば。必ず人を濟ふの日なし。暇あるを待て書を讀まば。終に書を讀むの時なし。紳瑜

○人の書籍を翻へし。人の書案を塗り。人の花木を折り損ふは。みな人に厭はるゝの事なり。竊に人の篋中の字跡を窺ふは。尤も不可なり。金言

○仙培那德曰く。我他人より害を受くとも。之を忍べば轉じて有用の物となるを得べ

一唯吾が真實の害となり。苦患を與ふる者
は。自己の過失ゐ由りて得さるをの也。西洋品行論

○陳幾亭曰く。君子ゐ二の恥あり。能くせる
所ゐ矜る恥あり。能くせざる所ゐ飾る恥な
り。能くせをを謙して以て之ゐ居り能くせ
ざれを學びて以て之を充つ。蓄德錄

○洪自誠曰く。耳中常ゐ耳ゐ逆ふの言を聞
き。心中常ゐ心ゐ拂るを事あり。纔ゐ是レ德ゐ
進ミ行を修むるの砥石なり。若し言々耳を
悅むし。事々心を快くせば。便チ此生を把て鴆
毒の中ゐ埋むるなり。菜根談

修身児訓巻之四終

附錄

楊子雲（前漢人）　陸宣公（唐人名贄）　程子（宋人兄ヲ明道ト稱シ弟ヲ伊川ト稱ス）　荀子（周人荀卿）　光武（後漢劉秀ヲ光武帝ト稱ス）　顏之推（齊人）

陸浮亭（明人名世儀字子分）　韓退之（唐人名愈）　薛文清（明人名瑄）

費元祿（明人）　魏環溪（清人名象樞）　程漢舒（清人名紞大）　馬援（漢人）

陶淵明（晉人）　倪文節（宋人名息字正甫）　許平仲（元人）　譚子（唐人名峭）

陳幾亭（明人）　吳懷野（明人）　劉宗周（明人）　司馬溫公（宋人名光字君實）

胡文定（宋人安國）　辛文懿（明人）　陳了翁（明人）

韓伯俞（漢人）　呂叔簡（明人）　倪正父（明人）　洪自誠（明人）　周子

宋人名敦頤　陳瓘（明人）　蘇黃門　顧悌　陳確修　張百戶　鄭叔通　梅鱗（以上六人ハ其後歷ヲ詳ニスル能ハス）

古斯敦（英人）　福格斯（フラングス）　谷惹西（ローレンツ）　戎孫（ヒュンソン）　若克（ジャック）

孫義爾士金（エルスキン）　那比爾（ナピル）　伯氏（ベイトン）　倍根（ベイコン）

コルルース　プロナトン　スマイルス　リツトン　富爾拉（フルラ）　セシル　空林登（クリントン右十九人未ダ詳ナラザル者アリト雖モ大抵英國人ニ係ル）　利久手爾（リクテル日耳曼人）

明治十三年十一月廿五日版權免許　第十七丁裏五行
同　十四年六月二日出版　重複アリ再版ニ付改正ス
同　十五年五月卅一日再版

東京府士族光風社長
編者出板　龜谷行

東京下谷御徒町二丁目八十七番地
發兌　柳原喜兵衛

大坂北久太郎町
牧野善兵衛

東京芝口一丁目
吉川半七

同　南傳馬町二丁目
石川治兵衛

同　馬喰町二丁目

定價六錢五厘